

Title	増補 日蓮聖人傳十講(山川智応著, 新潮社発行)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.3 (1928. 11) ,p.147(459)- 148(460)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281100-0148">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281100-0148</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 久米榮左衛門翁(岡田唯吉編)

讃岐の阪出と云へば、直に鹽田を想起し、その産出量は本邦第一で、この開發者こそは實に同國の久米榮左衛門翁である。本書は翁の小傳で、次に、この偉人の隠れたる功績に敬意を表するために、本書を要約記述する。

翁は安永九年同國大川郡相生村に生れ、名を通賢と稱し、父祖は舵師と農とを兼業として居つた。幼より伶俐にして發明心に富み、七歳の折時計を修繕して人を驚かしたと傳へ、十九歳の時上阪して天文學者間重富の門に入つて麻田流の數理天文を學び、二十三歳、父の計に遭つて歸郷し次いで文化三年二十七歳伊能忠敬の同藩測量に先づ命によりて藩内を實測し翌四年に至り、當時北門の警報頻りに聞ゆるを以て「戰船積覺」を奉る、同書は翁の學びし海軍流の一なる「全流」を基礎として横暴極まる露に對する攻防法を論述し、且つこれに適す兵船等を考察せしものである。同十一年頃より銃砲の製作に努力し、其考案にかゝる遺品十數種中には、今猶ほ専門家の嘆賞するもの多く、文政六年高松の在、郷東に於てその實演を藩主の一覽に供したといふ。

當時、同藩は財政困難に窮せしにより藩主頼恕は其の挽回策を謀せしめしを以て、翁は藩の行政財政の大改革案を献じ、その中用ひられしもの、一は即ち、阪出鹽田開發策で、文政九年に着手し同十二年八月竣工し、其工費は大部分私財を以て充て、九月藩主は之れを嘉賞して阪出鹽田碑を建設し、永世に顯彰した。爾後鹽業は日月に發達し、該鹽田は現に久米式鹽田と稱し、全國の模

範と推賞せられて居る。

翁は又、伊豫別子銅山の委囑に因りて、その大漏水の防禦工事を完成し、且つ探鑛にも改善を加へ、遠州新居藩の切開竝に浚川の改修工事の設計をなし、又水田水揚器械を發明して「養老の漣」と稱し、その模型を遠く江戸の淺草花屋敷に持出して用途を宣傳した。晩年(天保十一年)藩主に發明のドンドロ應用の火砲諸器を献じ、又大成匿銘を伴つて西洋銃砲の沿革より自分の發明にかゝる武器製作の主義方針を詳述し翌十二年歿す、年六十二。

大正十三年如上の功を追賞せられて、從五位を贈らる。翁の靈は、天恩に感激し永世に阪出の鹽田の發達を守護せらるゝことであらう。

終に、本書の編著、岡田氏は郷土研究者として命名高く、現に同地録田共濟主事の職にありて地方文化に貢獻せられつゝある。

(昭和三、七、十六夜、武田勝藏)

## 増補日蓮聖人傳十講(山川實業社發行)

鎌倉時代に於ける諸宗のうち、心ゆくばかり男性的にして其の信仰の熱烈なるは日蓮聖人の法華宗であつて、念佛無間、禪天覽、眞言亡國、律國賊と揚言して、凡て是等の諸宗を排斥し去り、尊と法華經とのみを中心とする新佛教を唱へた日蓮の出現は、たしかに佛教史上の偉業である。日蓮の教義こそは、當時の凡ゆる宗派を統一したるものにして、世界的宗教としての資格を完全に備具したる佛教なるが故に、すべからず聖人の精神を以て、將

來世界に向つて發展せしむべしとは、著者山川師の高遠なる理想であり信念である。この遠大なる理想の下に出されたる本書が國民精神作興の上に甚大なる裨益あるべきは謂ふに及ばず、本書はまたこれを宗教的立場を離れて純然たる史學の光に照らして觀るも、多大の價値の存するを發見するものである。

即ち本書は漫然たる聖人の生涯に關する記述に非ず、その生涯に幾多の時代を劃し、各時代の事蹟、人格、教義の三方面から之を論述し、然かもその教義と人格の發展が、生涯に於ける外的事件の進展と密接に關係せることを明かにしたものであつて、その論述の條理整然として、批判考證の妥當なる、幾多先人未到の史實を探索して聖人の傳に新光明を與へたるは洵に我等史學に關はれる末流の範とすべきところである。

茲に本書の骨子を一言すれば、「日本第一の智者となし給へ」の發願の下に、清澄寺に入りし若年の聖人は(第二講)、京畿に遊びて後、開覺立宗して法華教中心の教義を唱へ、諸宗を排し、豫言「立正安國論」に罪を得る頃には、既に「法華經の持者」なりとの「覺に達し(第三——四講)、更に伊豆流罪の後には持者を出て、「不惜身命の法華經の行者」或は「末法の法華經の行者」の自稱に進み、小松原法難の後には「日本第一の法華經の行者」と名乗り、やがて蒙古の來牒して安國論の適中と共に「日本の柱」を以て自任するに至り、上行菩薩としての自覺に入り(第五——六講)、更に文永の役によつて豫言の完全に實現せる後は「一閻浮提第一の聖人」と唱へて(第七講)、最高最上の自覺を得たる経路を述べ、身延入の晩年に及んでゐるが(第八——九講)、その教義、人格の發展の

諸階段を明らかにせるところ、多く世に流布する聖人傳に見る能はざる特色であらう。

また著者は佛教史上、國史上、及至は世界文化史上に於ける日蓮聖人の位置を論じ、或はその出現の時期の偶然にあらざるを力説し(第一講)、傳中の奇蹟を強調することなく、また之を解剖するの愚を避け、高級なる教理を平易に述べて、然かも熱誠溢るゝ文章の威力を輝やかしつゝ、よく俗耳に入り易からしめたる、眞に名著と稱すべく、日蓮研究の權威田中智學先生が巻頭に序して頌讚せられしも當然である。只若輩の素讀妄言を費したるを畏れつゝ著者に敬意を表するものである。(有賀春雄)

**Cleopatra's Needles and other Egyptian  
Obelisks, by Sir E. A. W. Budge.  
London, 1926. 8vo. XXii+308 pp.**

古代の西亞・エジプトに關するパツアの著述は既に頗る多數であるが、更に近く一九二五年に「アツシリヤ學の勃興と進歩」及び「エジプト」の二著作を出した外「バビロニヤの生活と歴史」をその翌年には「ナイル河の住民」と共に表題の著述を出した。彼の活動や偉なりといふべきである。

本書は前記後段の二書と共に、宗教出版協會(Religious Tract Society)から刊行せられた聖書地方の考古學及び歴史に關する叢書改訂版中の一冊をなすもので、もと一八八四年に刊行したる故シエームズ・キング師の小著「クレオパトラの針」に代へんことを